

漢字学習指導の一方法

——漢字と和語（日本語）の対応から——

西 一 夫

1. はじめに

漢字が和語（日本語）の表記手段として用いられてから長い時間が経過している。その間に表記手段としての漢字のあり方は様々に変化した。和語（日本語）を表記する手段として漢字が用いられ、さらに平仮名が加えられることによって、それは多様化したといつてよい。加えて、アルファベットなどをも取り混ぜながら、表記手段はさらなる変貌を遂げつつある。

そのような漢字をより身近な存在として習得させ、漢字が持つ豊かな表現の有りように気づかせることが、言語教育としての漢字学習を深めることになるのであろう。表現手段としての漢字は、教育の中で重要な位置づけがなされていることは贅言を要さない。さらには、従来の書き取り学習のみならず、漢字検定（日本漢字能力検定協会）の受験などをも含みこんでいる。

だが、漢字は本来中国からもたらされ、表記手段をもたなかった先人たちが様々な工夫をしながら和語（日本語）の表記手段として確立してきた経緯を知る機会が、生徒たちにとってほとんどないと言ってよいだろう。さらに漢字には音読み・訓読みと異なる読み方があり、習得に困難を感じる者も少なくない。生徒たちがこのような印象を抱く理由としては、漢字と和語（日本語）との結びつきにはどのような経緯があるのか、また、和語（日本語）を表記するために、先人たちはどのような工夫を凝らしているのかを、十分に了解していないという現状に拠るところが大きいといえよう^①。

本稿では和語（日本語）の表記手段として漢字を取り込んだ最初期の奈良時代の作品を収める萬葉集の表記例を用いながら、和語（日本語）と漢字との出会いについて生徒に考えさせることの可能性を探ろうとしたものである。なお、この報告は古文（古典）の授業で展開しているのではなく、現代文の教材を扱う中での発展的な内容として位置づけうるものである^②。

2. 漢字（訓字）と和語の対応

まず、漢字学習のなかで、一つの漢字に音・訓という複数の読みが存在することが、学習者の混乱や誤解の要因の一つであると思われる。その一方で訓は、和語（日本語）の意味をあらわし、国語を考える上で漢字表記との対応を無視して捉えることは出来ない。漢字と訓の関係について、白川静氏は次のように述べておられる。

漢字を国字として、訓よみで用いているのは、広汎な漢字文化圏のなかでも、わが国だけで

ある。音訓の両用を不便とし、なるべく訓よみを捨てようとする政策は、決して正しいものではない。それは漢字の意味的な理解を妨げ、漢字を形骸化し、けつきよく名詞の表記以外に漢字使用の道をとぎす、変則的な状態を招くことになる。これは国語の表現力の枯渇に連なるおそれがある。

(「[字訓] 普及版の刊行に当って」平凡社、1999年)

漢字の意味(義)を示すのが訓の用法であり、漢字の字義を知る上で訓の存在は無視できないのである。

しかしながら、漢字と訓の対応には、「潮・塩・汐」のいずれもが「しお」という訓を有するようになり、同音異字の関係が存し、その使い分けの難しさが問題とされることもある。「潮」と「塩」の使い分けは、海水それ自体と蒸溜して結晶化した固形物との違いがある点を指摘しうが、両者が相重なる部分を持ち、それが表記に反映していると思われる例も存するようである⁹⁾。このような同音異字の使い分けを厳密にした意味の分担化は、漢字表記の正確性を目指す一方で、漢字使用を規制してしまうことにもなりかねない。つまり、かつての和語(日本語)が有していた漢字と意味との緩やかな対応を、より厳密に切り出した結果が現行の同音異字の使い分けであると考えられよう。このような同音異字の関係ではないものの、「骨」という漢字が本来の字義としては持ち得ない「死体・屍」の意味をも文脈上持ちうる表現が存する事実は、漢字と和語とが緩やかな対応にありながら関係を成り立たせていた証左となるであろう。

とはいえ、稿者は漢字と訓との対応を無制限に広げようとするものではなく、一対一の関係のような形骸化し固定化した関係にとどまらず、やや緩やかな関係として捉え、漢字の字義と和語(訓)との関係を見据えた上で漢字を習得させるべきであろうと考えている。

かかる観点から萬葉集の作品をみるならば、漢字と和語との対応を形成しようとする苦心の跡が認められる。次の短歌二首は、その好例といえるであろう。

天平勝宝二年三月一日の暮に、春苑の桃李の花を眺矚して作る歌二首

春苑 紅爾保布 桃花 下照道爾 出立嬾婦 (19・4139)¹⁰⁾

[春の苑 紅にほふ 桃の花 下照る道に 出で立つをとめ]

吾園之 李花可 庭爾落 波太礼能未 遺在可母 (19・4140)

[吾が園の 李の花か 庭に落る はだれの未だ 遺りたるかも]

生徒には題詞を付した形で、歌は句毎に分けて萬葉仮名の表記のままでプリントにして配布した。句毎に分けてあることを手がかりに短歌の韻律を頼りにほとんどの句を読み解けた生徒はいないものの、訓読みする漢字で名詞の部分(「春苑」「紅」「桃花」「吾園」「李花」「庭」)は題詞の「春苑の桃李の花」を手がかりに読める生徒が多くいた。また古典文法に対する理解が深い生徒からは、「出立」を「出で立つ」と読むのではなく、「出で立つ」と読むのではないかとの意見が出された。さらには「落」をどのように読むかは、「ふる」「ちる」と解釈の分かれる部分であるが、李の花の散り方の特徴を表現するために「落」と表記しているのではないかとの意見も出された。なお、訓読みする漢字以外では「爾保布」が「にほふ」に相当し、古今異義語の一つであること

に気づいた生徒がいた。

このように生徒たちが自らの力で読み解こうとする意欲を支えているのは、短歌が一定の韻律（五七五七七）を持つことにある。韻律がなく、漢字を羅列しただけであれば、到底読み解くことは不可能である。

生徒の読みを修正しながら、全体の読みを示した上で、生徒から最初に出された質問は、二首の短歌それぞれに詠み込まれている和語「その」に「苑」「園」のごとく、同音異字の表記がなされている点である⁹⁾。特に「苑」は題詞にも用いられており、「園」との使い方に違いがあるのか否かについて注意が向けられた。これらの表記を、単に同字の連続を避けた表記（変字法）と捉えるならば、作品の本質を見逃してしまうことになる。

現代の表記意識としては、「苑」を「園」に書き換える傾向にあるようである（『漢語新辞典』大修館書店）。また、和語の「その（園・苑）」については「花・野菜・果樹などを栽培する一区画の土地。また、広い庭。庭園。」のように「にわ（庭）」との関わりも問題となる。そうした漢字がいずれも訓読されている点を重視するのであれば、一首全体の意味にもそれぞれの訓字が関係を有していると捉えるべきであろう。

二首の短歌に用いられた「その（苑・園）」の使い分けは、それぞれの字義との関連が存するのではあるまいか。個々の字義については、つぎのような解説が参考となるだろう（引用は『角川大辞源』角川書店）。

「苑」：①まきば。囲いを設けて鳥獸を放し飼いにする所。②その。にわ。草木を植えた庭園。また、畑。（以下の項目は省略）

「園」：①その。⑦野菜や果樹の畑。④にわ。一説に、垣のあるのを園、垣のないのを苑という。（以下の項目は省略）

つまり、「園」が建物に付随する現在の「にわ（庭）」とほぼ近い意味で用いられ、「苑」は「園」よりも広範な土地を指し示しめしていると了解される。しかも「園（その）」が用いられている歌の表記に「庭（にわ）」が用いられているのも、「庭」が「門から堂（表座敷）の階段までの空間。ながめのために、木を植えたり池を造ったりした、邸の中の土地。」のごとき字義であることを考え合わせると、これら三つの漢字は字義に則して有機的に用いられていると了解される。

漢字の字義から歌の内容を考えていくことで、二首の短歌は遠近の対比がはかられていることも「苑」「園」の用字によってあきらかにされる。訓字の使用はそれぞれの文脈と密接な関わりを有していると捉えられるのである。

二首の短歌に認められるこのような解釈は、萬葉仮名で書かれた本文を読むことによってはじめて成り立つ。しかしながら、現行の国語科教科書において萬葉仮名で萬葉集の作品を教材化している例は見あたらず¹⁰⁾、歌集としての個々の作品が持つ意味を捨象した教材化が行われているのが現実である¹¹⁾。萬葉集の作品は、萬葉仮名で表記されることによって、個々の歌が持つ特質を最大限に表現する。萬葉集に収められた歌を本来の漢字表記で教材化してゆくことは、漢字が持つ意味と和語の関係を確認させるという漢字指導のみならず、作品理解を深めてゆく上でも有

効な手段となるだろう。

このような漢字と和語との関係は、訓字にとどまらず、漢字の字音（音読み）の用法にも認められる。

3. 漢字（字音）と和語の交渉

字音（音読み）は、漢字を表音的に利用してことばを表すもので、漢字を取り入れたまま、すでに中国に存在した音を利用する表記法といえる。萬葉集では一字一音の仮名表記の中心をなす表記手段として用いられている。字訓とは異なり、漢字が持つそれぞれの意味（訓よみによって了解されるもの）を関与させない表記であることが基本であるけれども、次に示す仮名表記は、音仮名による表記手段としては、異例に属する表記といえる。

藤井 連、任を遷つされて京に上る時に、娘子が贈る歌一首

従-明日-者 吾波孤悲牟奈 名欲山 石踏平之 君我越去者（9・1778）

〔明日よりは 我は恋ひむな 名欲山 岩踏み平し 君が越え去なば〕

（草に寄す）

不明 公乎相見而 菅根乃 長春日乎 孤悲渡鴨（10・1921）

〔おほほしく 君を相見て 菅の根の 永き春日を 恋ひ渡るかも〕

この二首では、和語の「こひ（恋）」がいずれも音仮名で「孤悲」と表記される。このように「こひ（恋）」を音仮名表記する場合、萬葉集では、その多くが「孤」「悲」の音仮名を用いるという顕著な偏りをみせている⁹⁰。

このような特定の和語に対する表記の偏りは、和語が持つ本来の意味との関連を思わせる。つまり、和語の「こひ」は、旧漢字では「戀」と書かれ、「いとし（糸）」「いとし（糸）」と「いふ（言）」「こころ（心）」と字解されるのを想起すれば、「こひ」が担う和語の意味が音仮名での表記にも反映していると捉えるのが有効だろう⁹¹。ただし、「戀」を字解した中で「いとし（糸）」が「（相手）を愛しい」の意味として把握しにくい状況が一部の生徒に生じる。そうした生徒には、「愛しい」という心情が仮名書き表記「孤悲」を訓読みさせた状況（独り悲しむ）と密接に関わる、と助言することによってある程度回避できるだろう。

「こひ（恋）」とは、愛しい相手と離れた状態にあって逢いたく思い、愛しさが募る心情を意味するのであろう。このような解釈は旧漢字の字解とも調和している。ならば、「こひ（恋）」の本質は、ひとりで相手を思い続けることに本意がある。相手を「こふ（恋ふ）」心情は、相手と逢うことによって消滅する。そして再び離れた生活の中で「孤悲」の情が起り、切ない時間を過ごすことになるのである。先に示した二首の短歌も、かかる解釈の中で表現の深まりをみせることになる。

漢字の音で表記されることばは、漢字の義との交渉を持たないのを原則としているけれども、「孤悲」のような例は、漢字を取り入れた先人たちが苦心を重ねた結果として、ことばの意味を考

えさせる場合、有効な例となるであろう。

表記によって和語（日本語）が表象する意味を説明するために萬葉集の歌を利用する場合、題詞が示す内容にも留意して有効に活用すべきなのではあるまいか。特に1778番歌では、これまでは両者がいつでも逢える環境にあったけれども、「明日よりは（明日からは）」男は都へ行ってしまい容易に逢うことがかなわない。だからこそ男が越えた山を見ながら相手を思い続けようと詠むのである。ふたりの状況が題詞によって示され、「孤悲」の心情をより明確に捉えさせることが可能となる。

このような音仮名で表記された和語の例のほかに、音仮名を用いて表記の工夫をおこなっているとされる作品が存する。

燈之 陰ル蚊蛾欲布 虚蟬之 妹蛾咲状思 面影所見 (11・2642)

[灯火の かげにかがよふ うつせみの 妹が笑まひし 面影に見ゆ]

歌の意味とは関わらない表記であるが、虫偏の漢字を音仮名として集中的に用いている。表記に同類の仮名を用いている背景には、初句の訓字「燈」と関連して、燈火に集まるものたちという動作における〈主体—対象〉の関係が存するという⁽¹⁰⁾。これと同様な表記のあり方は、訓字との関連を有してはいないけれども、完了の助動詞「つる」と詠嘆の助詞「かも」を「鶴鴨」と鳥偏の二文字が取り合わせて用いられている例や、先の「嬌嬌」のように女偏の文字を連ねて表記⁽¹¹⁾する例があげられる。

先の「こひ（恋）」を音仮名で「孤悲」と表記することによって和語が持つ意味を表象する例と歌の主意とは直接の関連を持たないけれども、同類の音仮名を用いながら、音仮名でもって歌を表記する例とでは、それぞれの作品に対する理解が異なる。前者はその表記が歌の主意と密接に関わり、意味を表象し、後者は主意と関わらない見た目の工夫と捉えられよう。萬葉集での音仮名表記のあり方が多様な広がりを持つことを、これらの例によって知らせることができよう。生徒たちにとっては、見ることで漢字の意味が有機的に歌の内容に関与する「孤悲」の表記が、現在から見ても卓抜した表記であるとの理解を示した。その上で、生徒たちの思考は「恋」と「愛」との違いは何か、また自分たちがふたつのことばをどのように使っているか、といった問題へと広がり討論は深められている。

4. 漢字表記の深まり

上記のような漢字表記と和語（日本語）との関連は、萬葉集の様々な表記に展開している。そうした個別的な例を取りあげることによって、両者の関連をより一層深く理解することが可能となる。

漢字が担う文化的な部分と和語（日本語）が持つ文化的部分とを調和させながら多様な表記がなされてきた。そうした表記のありようを知ることは、先人たちが勝ちとってきた日本語表記の豊かさを実感すると同時に、書記する際にそれぞれの表記が有する特質を有効に活かすことが可

能となるはずである。

- ① 現在でも日常的に用いられる「九九」を表記に活用した音仮名表記として、次の例を示しうる。

……久有 今七日許 早有者 今二日許 将有等曾 君者聞之ニ、 勿恋吾妹

(13・3318)

[^{ひき}久ならば ^{なぬか}今七日だみ 早からば ^{ふつか}今二日だみ あらむとぞ 君は聞こしし な恋ひぞ我妹]

……不知也河 不知二五寸許瀬 余名告奈 (11・2710)

[^{いさやがわ}不知哉川 いさとを聞こせ 我が名告らすな]

……弱薦乎 獺路乃小野尔 十六社者 伊波比拜目…… (2・239)

[^{わかこも}若薦を ^{をの}狩路の小野に ^{しし}鹿こそば ^はい這ひ拜め……]

……玉社者 緒之絶薄 八十一里喚鷄…… (13・3330)

[玉こそば 緒の絶えぬれば くくりつつ]

いずれも「九九」を利用した表記となっている。これらの表記も歌の内容と関連しない音仮名表記のひとつである。これほどの古い時代から「九九」が一般に広まってをり、それを前提とする表記からは、先人たちが和語をいかに表記するかに知恵を絞っている苦勞のありさまを、身近な例を通して実感させることができる。

- ② 和語（日本語）の意味内容を分析した結果を文字によって表記している表意文字による例。

1. 一語を一文字で表記した例。

寒過 暖来良思…… (10・1844)

[冬過ぎて 春来たるらし……]

この表記は、季節とそれに伴う寒暖の関係を確実なものとして了解し、その上で季節を「冬」「春」と表記するのではなく、伴って感じられている「寒」「暖」によって季節を表現しようとしている。この例は、単独に用いられることはなく、「寒」「暖」を対比させた表現として用いられている。季節の循環に着目した表記として位置づけられよう。

…自嬾 然如年在 金待吾者 (10・2005)

[……己が妻 然ぞ年にあり 秋待つ我は]

真気長 恋心自 白風 妹音所_レ聴 (10・2016)

[まけ長く 恋ふる心ゆ 秋風に 妹が音聞こゆ……]

冷風之 千江之浦廻乃 木積成 心者依 後者雖_レ不_レ知 (11・2724)

[秋風の 千江の浦みの 木積なす 心は寄りぬ 後は知らねど]

これらはいずれも五行説の知識を前提とした表記であり、季節・方角・色彩とを組み合わせにしたものであることを認識させるのには好個の例といえる（青春・白秋・朱夏など）。さらに日本史の知識と結びつけて四方神（青龍・白虎・朱雀・玄武）との関係をも確認しうる発展性を有する表記である。

2. 一語を表すのに二字以上をもってした例。

……年魚走 芳野之瀧尔 尚不及家里 (6・960)

[……鮎^{あゆ}走る 吉野の瀧に なほしかずけり]

丸雪降 遠江 吾跡川楊…… (7・1293)

[霰^{あられ}降り 遠^{とほ}つ近^{あみみ}江の 吾^{あど}跡^{かはやぶ}川楊……]

……率而 未通女壮士之…… (9・1759)

[……率^{あどもひ}て 乙^{まどめ}女おとこの……]

遠音毛 君之痛念跡…… (19・4215)

[遠音にも 君が^{なげ}歎くと……]

いずれもが本来であれば、より理解しやすい漢字表記が可能であることを、内容の分析をし、その特質を踏まえた表記となっている。「年魚(鮎)」は寿命が一年である特質を表記に反映させている。「丸雪」は「あられ」によって認識される形状の特質を表記に持ち来した例である。「未通女」は結婚前の若い女性の特徴を捉えた表記である。いずれもが名詞での表記として用いられている例であるのに対して、四例目の「痛念」は動詞であり、これまでの三例とは異なる面を有する。「なげく」は、訓字としては「嘆」「歎」と表記するのが一般的であり、ことさらに「痛念」と表記したのではその読みを把握しにくいと思われる。だが、「痛念」は漢語としても存在し、この語は人の死を悼む場合に用いられるという特質を有する。しかも「痛念」が用いられている歌は人の死を悼む作品であり、和語「なげく」が人の死を悼んでいることを強調しようとする意図が表記の面から読み取れることとなる。「なげく」を「痛念」で表記しているのには、漢語に対する深い知識を背景とする部分が大きく関与している。

これらの表記を紹介した上で、生徒たちが「ことば」を分析して新たな漢字と和語との関係を作り出した例としては「激痛(なげく)」「荒雪(ふぶき)」などがある。

3. 一字で書けるものを二字以上で記した例。

……古昔母 然尔有許曾…… (1・18)

[……いにしへも しかにあれこそ……]

本来であれば「古」のみで「いにしへ」を表記しうるにもかかわらず、「昔」をあわせて表記している。過去のある時間を示す漢字として「古」「昔」があり、その時間が遙か遠くであることを強調しようとした表記と捉えられよう。類似の意味を持つ漢字を重ねることによって、それぞれが担う共通した意味を重ね合わせることになり、表現される時間が現在とはかけ離れていることを際立たせる。

これらの個別的な例は、漢字そのものが担う文化的・思想的背景を踏まえるものや、和語が指し示す対象の特質を分析した結果を漢字表記に反映させている例など多岐にわたっている。いずれもが漢字によって和語をいかに表記すべきかを深く考えた結果であり、現代の我々にしてみれば、考えの及ばない関係を形成した表記も存するのである。

このような表記の実態に生徒の注意を向けることによって、取り上げた歌のほとんどが書かれ

た（書記された）歌として成り立つ事実には、生徒は気づくことになる。言い換えれば、作品を理解するためには、それがどのように書かれているかが重要な要素であることに生徒は思い至るのである。

5. まとめ

先人たちが長い年月をかけて形成してきた日本語表記の一端を示すことによって、現代の学習者は漢字を書く（書記する）ことへの感心がいかに薄れているかを思い知ることになる。そうした要因は、単漢字の書き取りによって対象の漢字が「正確に」書けるか、ということにこだわり、漢字が本来持っている日本語との関係にまで学習者の意識が十分に及んでいないからに他ならない。さらには漢字の部首や旁が有する意味に対する配慮も欠け、類似関係にある漢字の意味を汲み取ることなく「丸覚え」し、意味も考えずに同音の漢字を書いてしまう状況を生み出している⁽¹²⁾。

このような漢字学習の現状を和語（日本語）と漢字との交渉という観点から捉え直すことによって、漢字が担う意味を強く喚起させ、ことばの意味との関わりで定着させることがある程度可能であるといえる。さらには書記された漢字あるいは文字が持つ特質をもあきらかにしうる要素を胚胎しているといえよう。

和語（日本語）を表記する手段としての漢字をいかに受容してきたかを手がかりにして漢字を学ばせることは、広くみれば漢字文化圏が持つ文字言語の豊かな世界を、かいま見る姿勢を学習者に勝ち取らせるものだともいえよう。そうした契機として、萬葉集の作品は有効な手段の一つである。

注

- (1) 同様な問題意識からの中学校における実践報告として、福田孝氏「現代日本語の書記法を意識させる授業」（『読書科学』第42巻第3号、1999年）がある。
- (2) 以下に展開する内容は、「2.漢字（字訓）と和語の対応」は、「ものことば」（鈴木孝夫）を学習した際の発展的学習事項として取り組んだ教材であり、「3.漢字（字音）と和語の交渉」「4.漢字表記の深まり」は、「ホンモノのおカネの作り方」（岩井克人）での発展的学習事項として展開した内容を整理したものである。これらの授業の中では、単に文字としての問題にとどまらず、書記の問題（筆記具の発達、表記手段の多様化など）をも絡めながら実施している。それぞれの配当時間はおおよそ1～1.5時間である。なお、実施した学年と時期は前者が中学校3年2学期、後者が高等学校1年1学期であり、対象は同一の学習者である。
- (3) 奥田俊博氏「『古事記』の表記—和化された字義をめぐって—」（『萬葉』第153号、1995年）参照。
- (4) 作品の引用に際して付した番号は、前者が巻、後者が国歌大観番号である。以下同じ。

- (5) 二首の表記については、小島憲之氏「むつかしき哉 萬葉集一春苑桃李女人歌をめぐって」(『文学史研究』(大阪市立大学)第35号, 1994年) 参照。
- (6) 参考として古写本の写真を示す例は広く用いられているが、作品の傍らに萬葉仮名を付す例はほとんど認められない。
- (7) 古典和歌(特に萬葉集・古今和歌集)の教材化に対する考察は別稿を用意している。
- (8) 『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂, 1967)の「恋ひ」の【考】を参照。
- (9) 伊藤博氏「ひさかたの月(恋)」(『萬葉のいのち』所収, 塙新書, 1983年) 参照。
- (10) 奥田俊博氏「『万葉集』の仮名表記—表意性を有する例を中心に—」(『日本語と日本文学』(筑波大学国語国文学会), 第27号, 1998年) 参照。
- (11) 女偏を連ねる「^ま憾^{とめ}孀」の表記は、音仮名の例ではないけれども、同じ偏を連ねることによって、意味を強く表象する効果があることを指摘する意見が生徒から出されている。
- (12) 極端な例を示せば、「彼女はカモクな人だ。」に対して「火木」と書くような誤答がある。